

福井大学学術交流協定校への派遣留学（交換留学） 月例報告書（2月）

留学先：ハンブルク大学

氏名： 片川 絵里奈

2月のはじめにはアルスター湖が凍るほどの寒さでしたが、近頃は日中だと気温が10℃までになり、春の兆しさを感じます。氷点下の季節を乗り越えて、私の心にも余裕が出てきました。

2月から4月までは大学も休暇に入るので、ドイツだからこそできる経験をし、有意義に過ごしていきたいです。

今月は「ハンブルク日本語教師の集い」というイベントに参加し、日本語教育の現場の様子、難民教育の実態を知ることができました。またプライベートでは2月末には日本から友人が来てくれ、初めて自力でハンブルクを案内しました。住み慣れた町でも、案内することで再発見できるハンブルクの良さがありました。その魅力を、皆さんにもお伝えできたらな、と思います。



ハンブルク日本語教師の集い

私は福井市で在日外国人の子どもの学習支援に携わっていたこともあり、日本語の教授法や日本語教育の実態、また移民教育について興味があります。このイベントはベテランの方々の経験を聞くことができる絶好の機会だと思い、参加しました。

今回のキーワードは「外にひろがる教室」でした。「学習者には、教室で学んだことを実際の会話で生かす場が必要だ」という考えのもと、スカイプを使ってオンラインタンデムをするプロジェクトを立ち上げた方がいました。その他、月に一度開かれる日本語のしゃべり場を設けた例もあり、現代における語学学習の可能性を感じました。

日本語教師とひとことで言っても皆さんキャリアは様々なので、異なる経験を聞くことは本当に面白く、刺激になります。ある方は難民にドイツ語を教えた経験があり、「難民の中には学校に行ったことがない人もいるから『先生が話しているときは静かにする』といったことから教えなければならず、辛かった。」と苦悩を語っていました。また、息子がドイツの小学校に通っているという方からは、「難民の子ども達は普段、教室から取り出され、週に一度だけ自分のクラスに戻って勉強している。」という現状を聞きました。

日本にいる外国にルーツを持つ子どもたちへのより良い支援に繋げるためにも、移民の多いドイツで、彼らのドイツ語の学習方法や、ドイツ人の子ども達との人間関係、移民教育を支える社会の仕組み、などを学びたい、という思いが強くなりました。

ヨーロッパと世界をつなぐ町、ハンブルク



ハンブルクの名所として、まず外せないのが Speicherstadt (赤レンガ倉庫街) です。

1883年に建設が始まったこの倉庫街は、100年以上の歴史を持っています。2015年には、19世紀から20世紀の産業発展を象徴する建物として、世界遺産に登録されました。これらの倉庫はかつて、世界中から輸入したコーヒーや紅茶、香辛料などを保管する場所として使われていたそうですが、今ではコー

ヒー博物館やスパイス博物館、チョコレート博物館などの施設が入っており、見どころ満載のスポットになっています。

そのなかでも特に有名なのが「ミニチュア・ワンダーランド」という世界最大の鉄道模型博物館です。ドイツやスイス、オーストリアの街並みを再現したセットの中を鉄道が駆け抜けていくのですが、列車はコンピュータにより集中管理されており、空港では実際に飛行機が離陸するという徹底ぶりです。建物や人物、動物などにも各地域の文化を彷彿とさせるような工夫が細部まで凝らされているため、ハンブルクにいながらも世界を回っているような気分になります。2000年建設開始以来、次々と新しいエリアの建設に着手しており、今ではアメリカや北欧、イタリアといったセクションも楽しむことができます。



ミニチュア博物館の隣にある、自家焙煎をしているカフェ「Kaffeerösterei」もオススメです。ここでは、倉庫街を眺めながら美味しいコーヒーをいただくことはもちろん、世界中から取り寄せられた様々な種類のコーヒー豆を買うことができます。最近では店員さんに味の好みを伝えて、一緒に豆を選ぶのが楽しみのひとつです。

ハンブルクは古くから貿易で栄えていた港町ということもあり、様々な文化が混在していて、至る所で世界とのつながりを感じることができます。それも私がハンブルクの雰囲気惹かれた理由のひとつなのかもしれません。この春休みを利用して、いろいろな場所を巡り、自分の肌でその土地ならではの魅力を感じ取りたいです。